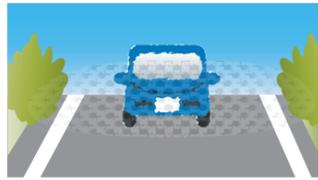


陽炎（かげろう）・蜃気楼（しんきろう）・逃げ水

陽炎・逃げ水・蜃気楼はどれも光の屈折による自然現象ですが、見えるもの、見える条件、見える場所に違いがあるようです。それぞれの特徴を調べてみました。

陽炎（かげろう）



陽炎は、急に日差しが強くなり、地面付近の空気が熱せられて空気が上昇する現象で、地面から炎のような揺らめきが見え、夏のアスファルトの上の景色がゆらゆら見えたり、口ウソクの上の景色がゆらゆらしているのが陽炎です。空気は熱せられると、軽くなり上昇するので地面から空へ向かって空気が流れます。熱せられ密度が小さくなった空気は、風などによって異なる密度の空気と乱雑に混ざり、通過する光が不規則に屈折することで景色がゆらいで見えます。陽炎はほんの一部分だけの温度差で見られるのが特徴です。

蜃気楼（しんきろう）

蜃気楼とは上位蜃気楼のことで、下位蜃気楼とは逆に低い所に冷氣層があり、その上に暖気層がある時に遠くの景色が上下に伸びたり上下が反転して見えます。（遠くといっても何百キロも離れた外国などの景色が見えるわけではありません）蜃気楼の見え方は、冷氣と暖気の境目での温度変化がゆるやかな場合、光は小さく曲がって上方に伸びて見え、温度変化が急激な場合は光は大きく曲がって上方に反転して見えます。蜃気楼は富山湾や琵琶湖など限られた場所で見ることができませんでしたが、近年、知識の普及により全国各地で見られる観測地が増えてきているそうです。蜃気楼の歴史は古く、日本で判明している確実な最も古い記録は寛文9年（1669年）に加賀藩に仕えた儒学者で沢田宗堅（さわだそうけん）が魚津の蜃気楼を記述した「寛文東行記」です。また、1700年代に記された「魚津古今記」では、加賀前田家五代（利家を初代とした場合）前田綱紀が魚津で蜃気楼を見た後、蜃気楼を「喜見城（きけんじょう）」と呼ぶように命じたと伝えられています。それから、同じ加賀前田家十一代・前田治脩（はるなが）は寛政9年4月（現在の暦で1797年5月）に江戸から金沢への道中に魚津の御旅屋（おたや：加賀藩主の宿泊所）で蜃気楼に出会い、家来に蜃気楼の絵を描かせました。この絵図は、時間とともに変化する蜃気楼を6枚の図幅で描き、実景の絵の上に順次重ねて見るように工夫され、図中には日時や変化する様子などを記した文章も添えられています。この絵図「喜見城之図」は、金沢市にある玉川図書館近世資料館に収蔵されているそうです。

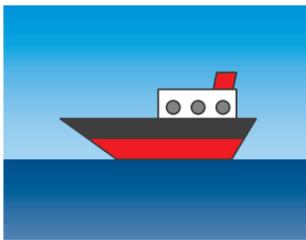
※資料名：魚津蜃気楼之図 喜見城之図 断
蜃気楼の名前は、古代中国の言い伝えに由来します。蜃気楼の「蜃」は大ハマグリのこと、昔の中国では大ハマグリが暖かい日にあくびをすると、その吐いた気から空中に楼閣（高い建物）が現れると考えられていました。その為このような現象を「蜃気楼」と呼ぶようになったそうです。

逃げ水（にげみず）

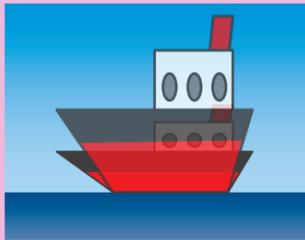


逃げ水とは、炎天下にアスファルトの道などで遠くに水たまりがあるように見える現象です。いくら追いかけても追いつくことができない事から逃げ水と言われています。別名地鏡（じかがみ）とも呼ばれています。逃げ水は、蜃気楼の一種で、下位蜃気楼に含まれます。下位蜃気楼は、実物の下側に現れる蜃気楼で海水や地面表面の空気の温度が高く上部の空気が冷たい時に現れる蜃気楼です。アスファルトが太陽の熱で熱せられ、地面付近に温かい空気の層ができます。その層と空気中の冷たい空気の層の境目で光が屈折することで、地面に鏡の様な水たまりがあるように見えます。同じ下位蜃気楼にだるま太陽があります。海水表面が暖かく上部の空気が冷たい時に、太陽の下側にもう一つ太陽があるように見え、だるまの形になります。逃げ水を含む下位蜃気楼は低いところに暖気層、その上に冷氣層がある時に見られるのが特徴です。

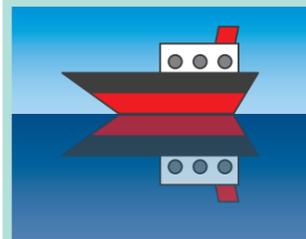
実景



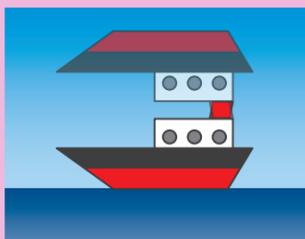
上位蜃気楼 伸び



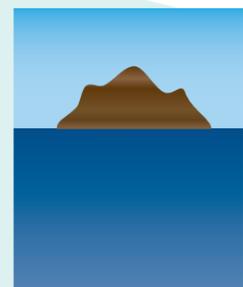
下位蜃気楼 下に反転



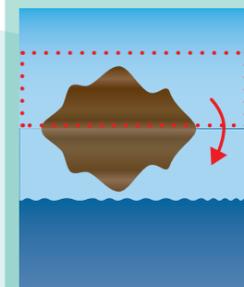
上に反転



実景



下に反転（浮島現象）



対象物とその上の空が一緒に反転すると水平線が反転した空で隠れてしまふ島が浮いた様に見えます。

立秋（りっしゅう）

8月8日頃

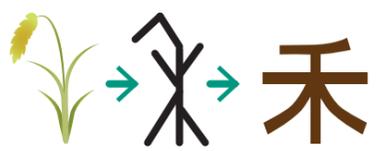


立秋とは、暑さが続くが秋の気配をほのかに感じる頃。まだまだ暑い盛りですが、暦の上では秋の始まり。時折吹く涼しげな風に秋の訪れを身近に感じられます。

- 涼風至 **すずかぜいたる** 8/8～8/12頃
厳しい暑さが続きますが、季節は少しずつ確実に進んでいます。日が暮れると涼しい風が吹いてきたり、草むらから聞こえてくる虫の声も季節が秋へと進んでいることを実感させてくれます。
- 寒蟬鳴 **ひぐらしなく** 8/13～8/17頃
ヒグラシは強い日差しや暑さが苦手なようで、早朝や夕暮れを待って鳴くそうです。夕暮れ時に「カナカナカナ…」と鳴くヒグラシの声は淋しげに聞こえ、夏の終わりを感ぜさせます。
- 蒙霧升降 **ふかききりまとう** 8/18～8/22頃
早朝の森や水辺では、霧が立ち込め幻想的な風景が見られます。濃い霧が発生した時に、葉や枝に付いた霧の粒が集まって水滴として落ちてきた物を「樹雨（きさめ）」と呼ぶそうです。

処暑（しょしょ）

8月23日頃



処暑の「処」には止まるという意味があり、暑さがおさまる頃を表わします。残暑は厳しいものの、夏の太陽の勢いが徐々に鎮まり、朝晩は過ごしやすくなる時期です。

- 綿糸開 **わたのはなしべひらく** 8/23～8/27頃
綿の実を包むガクが開き始め、白い綿が顔を出す頃。綿の木は7月～8月にかけて黄色い花を咲かせ、実をつけます。実がはじけて綿花が現れたら、種を包む綿毛をほぐして糸を紡ぎます。
- 天地始肅 **てんちはじめてさむし** 8/28～9/2頃
「肅」は鎮まる、弱まるという意味があり、ようやく夏の暑さが収まり始める頃。朝晩の空気が段々と冷たくなり、秋の気配が漂ってくる時季です。万物が改まる時季ともされています。
- 禾乃登 **こくものすなわちみのる** 9/3～9/7頃
田に稲が実り、稲穂が色付いてくる頃。「登」には実るという意味があり、「禾（のぎ）」の字は、もともと穂を垂らした稲の姿を描いた象形文字だったそう。稲や麦などの穀物を指します。

熱中症対策には塩分も大切です！

- 人間は大量の汗をかくと体内の水分や塩分が失われ、体温を一定に保つことができなくなります。このように体温を下げる機能が気温上昇に追いつかなくなると体温が上昇し熱中症を発症する原因となります。体から塩分が失われると低ナトリウム血症などを起こして痛みを伴う筋肉のけいれんが起きます。また、体温が上昇すると体表から熱を逃がそうと皮膚の血管が広がり皮膚の血流が増加します。その結果、脳やその他の重要な臓器への血流が減ってしまい、めまいや頭痛、吐き気などの全身性の症状を伴います。症状が出たら涼しい場所へ避難し、服をゆるめて体を冷します。氷水や保冷剤などを首、わきの下、太ももの付け根（股関節部分）にあてて冷したり、手足など露出した皮膚に水をかけてうちわや扇風機であおいで冷すのも効果的です。意識がはっきりして自分で飲めるようならスポーツドリンクや経口補水液を飲ませます。水分を自分で摂取できない場合や、水分・塩分を補給しても症状がよくならない場合には医療機関を受診して下さい。早めに受診することが大事です。力が入らない、ごくんと飲み込めず口からこぼれてしまったり、呼びかけに応じないなど意識障害がある場合は危険な状態なので、すぐに救急車を呼びましょう！！熱中症になってしまった時の対処もとても大事ですが、そうならぬように気を付けることが一番です。熱中症で受診した患者さんは水やお茶をたくさん飲んでいただけなのに熱中症になってしまったという方が多いそうで、体内の塩分・ミネラルが不足したことが原因だったようです。たくさん汗をかいた時には水分だけでなく塩分もセットで補給して下さいね(^o^)/～

※熱中症の予防・対処について、持病のある方、水分・塩分の制限のある方は医師にご相談の上、指示に従ってください。

住宅建築まめ知識

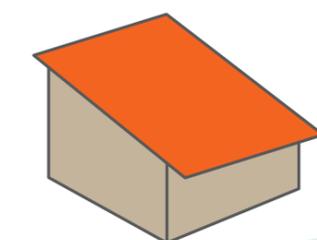
今回のテーマは

屋根の形（片流れ屋根）

今回のテーマは
寄棟屋根 です。

屋根の形には色々な種類があります。外観のイメージに合わせて選ぶことも大事ですが、メンテナンスの手間や太陽光発電システムの設置、落雪対策なども考えて最適な形を選びます。今号からは、それぞれの特徴やメリット・デメリットをお伝えします。

片流れ屋根（かたながれ）



一方に傾斜した屋根の形状を指し、すっきりした印象で人気があります。

メリット

- ・形がシンプルなので他の屋根に比べて材料費や工事費用が抑えられる
- ・スタイリッシュでデザイン性が高い
- ・屋根の傾斜の角度によって、屋根下のスペースを屋根裏部屋として活用でき、屋根が片側のみなので壁に窓が付けられます
- ・大きな1枚の屋根は太陽光パネルを多く設置することができ太陽光発電に有利です。南向きにして屋根勾配を調節すれば、効率よく発電できます。

デメリット

- ・屋根がかからない壁面は、風雨にさらされ劣化を早めてしまう。
- ・雨水が一方にすべて流れていくため、屋根や雨樋に負担がかかる
- ・傾斜が北向きの場合は太陽光発電を設置するメリットが享受できない
- ・空気が循環しにくいので湿気を溜めやすい

編集後記



ami

熱中症の予防に手のひらを冷す方法があります。洗面器やバケツに10～15℃程度の冷たい水を張って5～10分両手をつけるというもので、効率よく血液の温度を下げるができるそう。冷たいペットボトルを握るだけでも効果があるので手軽にできてよいですが、冷たすぎると逆効果になるのでほどよい冷たさを守って下さいね。あと、水分補給にお茶を飲む場合は麦茶がおススメです。麦茶にはミネラル（ナトリウム、カリウム）が含まれていて脱水症状対策に効果的です。まだまだ暑い日が続きますので、お体に気を付けて過ごして下さいね(^-^)

